

## 風俗圖 滋賀圓滿院藏

本圖は既に本誌第七號に掲載し、田中氏の解説を加へられたものであるが、今般更に如實に原品を髣髴せんが爲に原色刷として掲げたものである。本圖に關する記述は既に其際に悉されてゐるのであるが、未見の人の爲便宜之を再録することとする。

圓滿院風俗圖は宸殿一の間床及び床間脇三間に及ぶ壁面貼附繪より、東北隅の一室北側二間半四面の襖と、是れに加へて床間側壁等に互り、總長六間に餘る雄大なる畫面を占める、本誌所掲のものはその床壁貼附繪の一部分である。不幸にして此の圓滿院殿舎は、明治初年滋賀縣廳として使用されたることありしより、本圖の如きも全面に互つて賦彩の剝落汚損甚だしく、殆んど墨骨を露出せる部分を見ることも少くはないが、錆びたる金色の上に、限りなき高致を縦にし、構思極めて蒼老、巧に雲形を置いて圖様を整理するの外、些か修偽の跡を見ず、墨描また頗る輕雋の筆を運び、濃麗細緻の圖様にも似ず、寧ろ淡々として水の如き滋嗜に飽かしめるものがある。加之細部と全景と、互に相應じて、よく此の大畫面に限りなき高雅の韻致を盛り得たことは、また一代の大手筆の所産と云ふべきである。

由來圓滿院殿舎は所傳に據れば、寛永十九年徳川家光の皇居を修理するに當つて、明正天皇は舊殿の一部を下賜し給ひ、正保四年六月移築功成つたもので、その風俗圖障壁はもとより、其他花鳥人物等、傳存九十面に餘る障屏畫は何れも當時殿舎と共に下賜されたものと稱されてゐる。無論此の風俗圖の畫格より見るも、寛永以後の作品とは見難く、此の所傳は消極的に認容され、且慶長以降寛永に至るまでの皇居營造物中、紫宸殿は仁和寺に、清凉殿は南禪寺に下賜さるゝ等、文獻の徵すべきものもあるから、本院現存の宸殿も亦恐らく其の一であらうが、而も該殿の舊皇居に於ける創建に就いては、今是れを詳に闡明す

ることは困難である。従つて此點より本圖揮寫の年代を推定することは不可能であるが、而も其の圖様に於ける風俗より見るも、慶長前後の變遷に至つては殆んど明かに是れを徵證すべき資料なく、此の點より云ふも年代推定の根據を捕提することは困難である。たゞ是れを慶長後半の遺品と認め得べき舊名古屋離宮對面所風俗圖に比するに、後者が客觀的觀照に於て一步を進めてゐるだけ多くの部分に於て遙かに圖形的に理智的に傾き、工密細緻であるに對して、本作品の構想筆致兩ながら遙かに模茂を極めてゐることは、此間相當に時の介在を認めざるを得ない。また慶長十年前後の作としての傍證を有せる京都豐國神社藏狩野内膳筆豐國神社臨時祭圖に比較するに、縦ひ該圖が前者に比して、より多く古致の饒かなるものがあるとしても、尙本圖の高雅醇熟の畫品に數歩を譲るものがある。たゞ若し狩野秀頼筆高雄觀楓圖に比する時、其の重厚簡朴の畫致に於て稍及ばないことを見ることは、やがて本圖の稍時を下ることを示すもので、本圖は此の兩者の中間に繪かれた一遺品と考へたい。少くとも、本圖が縦ひ事實の上に徳川期に入つての筆作なりとするも、當代新興の畫様を傳へた畫人の作にはあらで、寧ろ古様を學んだ老練の畫師の毫端に出づるものとすることは動かし難い所であらう。

本圖筆者果して何人であらうか、寺傳に依れば岩佐又兵衛の作と傳稱してゐるが、そは當代前後の多數の風俗圖の例に洩れざる一俗傳として、素より一顧の價値はないが、たゞ同殿内に於ける古狩野の様式を傳へた花鳥圖障屏のあるものゝ上に部分的類似の手法を見ることは、縦ひそれ等が同一畫師の筆作に非ずとするも、亦等しく桃山期に於ける狩野派の何人かの遺品と見るべきであらう。(編輯掛)

## 直菴筆商山四皓虎溪三笑圖

和歌山 遍照光院藏

直菴畫中特に珍らしい人物畫の代表作として既に著名な一圖である。